Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2013.11
発行者：中島秀雄
事務局：畑文夫
編集部：荒井崇

NO.55

CONTENTS

- 「キャパ」の写真を巡って･･･その 2
- ネガ濃度の簡易測定
- 静物撮影会報告
- 暗室ワーク報告
- ドイツのギャラリーオーナーによる
  ポートフォリオレビュー ＆ 講演会
- ゾーンシステム研究会定例会日誌
- インフォメーション

「キャパ」の写真を巡って･･･その２

中島秀雄

「キャパの十字架」の著者・沢木耕太郎は、「キャパの写真 ”崩れ落ちる兵士”には、演じられたものとは思えない迫真力がある。顔の表情、体の倒れ方、銃からの手の離し方、どれをとっても圧倒的なリアリティーがある」と本文に書いている。

沢木が本格的にキャパの写真に関心を抱くようになったのは、リチャード・ウィーランの書いたキャパの伝記「ロバート・キャパ」の翻訳を手がけたことがきっかけだった。

いったい沢木はウィーランの書いた伝記から何を読み取り、何を見たのだろうか。

今回、改めて「キャパの十字架」を読み直してみた。

キャパの写真「崩れ落ちる兵士」が 1936 年フランスの写真週刊誌「ヴュ」に載ったことは前回に紹介した。実は、ウィーランの書いたキャパの伝記には、「ヴュ」に載ったキャパの写真一頁がそのまま載っていたのだ。そこには二枚の写真が載っていて、「崩れ落ちる兵士」の写真が上段に、下段には地面に倒れた兵士の写真になっていた。両方とも横長のほぼライカ判からプリントされたようなサイズになっていた。よく見ると、二枚の写真は空の様子と雲の形、遠景の山並、地面の傾斜、被写体との距離、被写体の陰影は同じに見えた。このことから二枚の写真は、同時刻に撮られ、兵士は同じ人物の様にみえた。上段の崩れ落ちる兵士が、地面に倒れた姿という時間経過として読み取れる連続撮影と考えられた。当時も二枚の写真の兵士は同じ人物と見られ、疑いはなかったようだ。

しかし、２枚の写真をよく見ると白いシャツを着た上段の兵士は倒れながら銃を手から放しているが、下段の黒っぽいシャツの兵士は倒れても銃は握っていた。また、両者のベルトの位置や銃弾の箱の位置も違うことが分かり、兵士が同じ人物と見るには無理があるように見えた。著者のウィーランもそのように見ていたがゆえに、わざわざ一頁に載せていたのだ。

ウィーランがキャパの伝記にこの二枚の写真を載せたことについて沢木は、(「崩れ落ちる兵士」の写真の聖性を守ろうとする側にとっては極めて危険なこと）と本文で述べているように、今までキャパの写真に疑いを持たずにいた沢木は、この二枚の写真が載ったページがきっかけとなって疑念を深めていったようだ。

もしこの二枚の写真が別々の兵士だとするなら、どちらかの写真に兵士の死体が写っていてもおかしくない。白いシャツを着た崩れ落ちる兵士を最初に撮影した後、同じ場所でもう一人の兵士が撃たれそれを撮ったとするなら、白いシャツを着た兵士の死体が写っていてもおかしくはないからだ。

ウィーランの書いたページにはキャパが捉えた兵士たちの戦闘シーンのようすが載っている。塹壕から体を乗り出して銃を構える兵士、飛び出している兵士、戦闘にしてはあまりにも無防備な様子にみえた。

1996 年、朝日新聞の夕刊にキャパの「崩れ落ちる兵士」の男はフェデリコ・ボレロ・ガルシア青年と身元が特定された記事が載った。これは、

郷土資料家の調査とガルシア青年の親族の証言がもとになっている。

ところで、ニューヨークにある国際写真センター(「I.C.P.」 インターナショナル・センター・オブ・フォトグラフィー) は、ロバート・キャパの弟コーネル・キャパが中心となって作られた。キャパの資料はもちろんのこと、現在では、様々なジャンルの写真を扱い、写真に興味があればだれでも訪ねたくなる組織になっている。現在では、ニューヨークはおろかアメリカ写真の中心を成す大きな組織になっている。かつて私も訪ねたことがあり、開催中の写真展をみたことがあるが、誰の作品なのか全く記憶にない。

崩れ落ちる兵士の男が身元確認できるかどうかが議論の中心になった頃、ICP におけるキャパ研究の中心になっているウィーランもキャパの潔白を証明するものとして展開していた。しかし、身に着けている装具から出身地が分かった程度で、死んだかどうか確認するまでにはいたらなかった。

2009 年スペインのペリオディコ紙に「崩れ落ちる兵士」は「やらせ」であり、セロ・ムリアーノではなくエスペホの丘であるというニュースが載った。バイス・バスコ大学で映像論を専門とする研究者ススペレギ教授の調査によるものだった。

このニュースがきっかけとなり沢木は、スペインへ出向くことになった。

ススペレギ教授へのインタヴューから分かったことは、ウィーランの書物に載った写真から場所をエスペホの丘と特定し、当時この場所で戦闘はなかったこと、であるから男はフェデリコ・ボレロ・ガルシアではない。また、三脚を使いカメラはローライでポーズを付けて撮ったことなどが語られた。そして、当時の若者は、英雄的な死を演じることに抵抗はなかったとも語っている。

現地エスペホの丘を訪ねた沢木は、取材を重ねるうちに地元の人達から当時この場所で演習を行っていただけで、戦闘はなかったという証言を得た。また、ウィーランが発表した「これが戦争だ」を見るとエスペホの丘で撮影したキャパの写真には確かに演習らしいシーンが何枚も撮られていた。

しかし、一般市民があれほどうまく撃たれる瞬間の演技など出来るのか、また、身を守る大事な銃を手放し地面に落とせば照準は狂い、銃身にダメージもあり、放り投げるなど絶対できない。謎は深まるばかりだった。

沢木は、ススペレギ教授の「崩れ落ちる兵士」はローライで撮っているという一言に、「ライフ」誌に載った写真と「ヴュ」誌に載った写真のサイズの違いに興味を強めた。

雑誌「ヴュ」に載った「崩れ落ちる兵士」とライフ誌に載った同じ「崩れ落ちる兵士」の写真は、空の広さに大きな違いがあるのだ。ライフに載った写真は、空の広がりが大きく、拡大したプリントのように見えなくもない。もし拡大したとすると、左右が合わなくなる。左をカット、右側をカットしたりすると「ヴュ」誌に載った写真と合わなくなってしまう。

キャパは、ローライフレックスとライカの 2 台のカメラを持っていたから、教授が言うように「崩れ落ちる兵士」はローライの 6x6 判を使っていれ

ば空は広く撮れる。ヴュ誌には空を少しカットして使い、ライフ誌にはローライの正方形をほぼそのままに空を広く入れて使ったとすると謎は一気に解ける。

沢木は取材を続けるうちに （「崩れ落ちる兵士」はキャパがライカで撮影した。「ライフ」誌はエアブラシを使って空を拡大しほぼ正方形になるように加工した。ライフ誌は、正方形写真ページが特長でよくやることだ。） という情報も得ていた。

教授が言うようにキャパがローライでポーズを付けて撮ったとしても「崩れ落ちる兵士」には、演じられたものとは思えない迫真力、圧倒的なリアリティーがある。また、ローライに三脚を付けて撮ったと教授が語っていたが、被写体が画面の真ん中にないことも沢木を悩ませた。

いったい、ローライを三脚に着けてポーズをとり、迫真力、リアリティーある写真が撮られたそのときの状況はどのようなものだったのか。

続く・・・・

＊参考資料: 沢木耕太郎著「キャパの十字架」
ライフ写真講座
ロバート・キャパ展図録

ネガ濃度の簡易測定

畑文夫

ゾーンシステムの基本は被写体の明るさ（輝度）と、ネガの黒化度合い（濃度）の関係を把握して露出や現像をコントロールすることにあります。そのためにはネガの濃度を測定しますが、光学濃度計は業務用の機器でありアマチュアが備えるには高価で使用頻度もそれほど高くはありません。

光学濃度計の例（X-Rite 社）

そこで特殊な装置を使用せずにネガの濃度を測定し、実用感度を決定する方法を紹介します。

「実用感度」とは、グレーカードを ZONE Ⅰ として撮影～現像したときにネガの濃度がスヌケ＋0.1 になる感度を意味します。　実際には、まず露出計にメーカーの公称感度（箱に書いてある感度）をセットしてグレーカードを測光し、それを ZONE Ⅰ（メーター指示より 4EV アンダー）とします。そしてその前後 1/2 又は 1/3 絞りずつ変えながら段階露光撮影して現像します。（撮影 1）
ここで、濃度がスヌケ＋0.1 に最も近くなるネガのコマを選んで決定します。

１．スポットメーターを使用する方法

■用意するもの

●スポットメーター

（０．１ＥＶ単位で測光できるものが望ましい。）
現在入手可能なものは

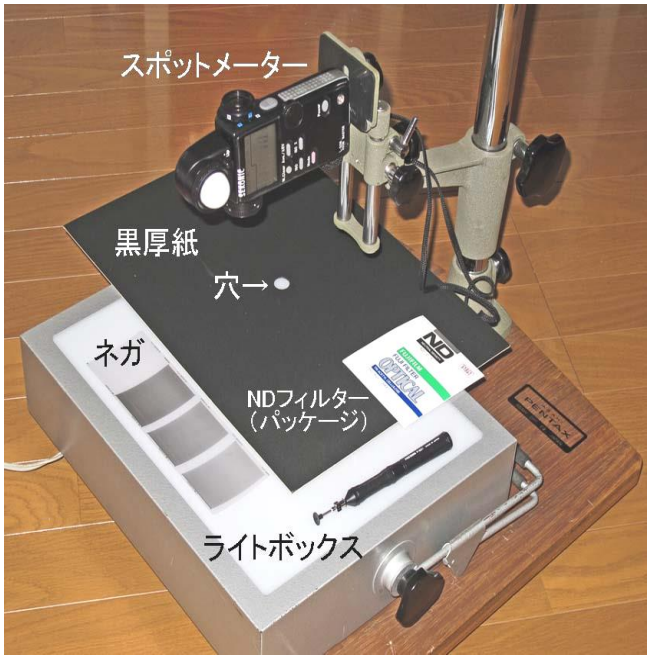
・セコニック　デジタルマスター
・ペンタックス　デジタルスポットメーター（0.33EV 単位）
・ミノルタ　スポットメーター（中古のみ入手可）

●クローズアップレンズ

（フィルター枠ねじ込み式）
スポットメーターにより取り付けられるサイズは異なる。セコニックはステップアップリングが必要。
No.3～4 程度が適当。（各自テストして選ぶ）

●ライトボックス

（交流電源のもの）
小型の三脚、または複写スタンド



●濃度 0.1ＮＤフィルター

（75㎜ 角シート）

ガラス製ねじ込み式ではなく、シート状のもの。

（富士またはコダック製）

「0.1」は ZONE Ｉを決めるネガの濃度。

●黒厚紙

ライトボックスの全面をカバーする大きさのもの。中央に 10ｍｍ程度の穴を開けておく。

■準備

(1) スポットメーターにクローズアップレンズをねじ込み、ライトボックスの中央を垂直に見下ろすように複写スタンドなどに固定する。

(2) 厚紙をライトボックス上に置き、スポットメーターの測光部が穴を通して直接ライトボックスを測光できるように位置を決める。厚紙の表面にピントが合うように高さを調節する。

■測定手順

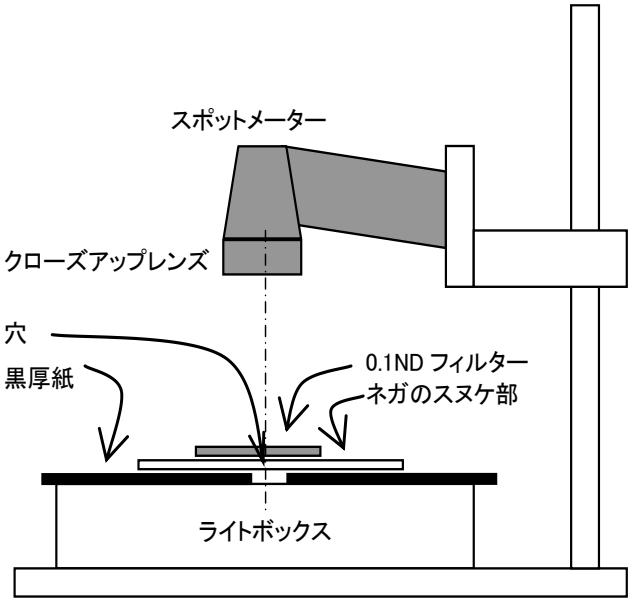
(1) 部屋の照明などは消し、なるべく暗い環境にする。スポットメーターにセットするフィルム感度は任意だが、測定途中で変えないこと。

(2) ライトボックスの電源を入れ、数分以上放置する。（ライトボックス明るさを安定化するため）

(3) スポットメーターでライトボックス面を測光し、そのＥＶをメモする。（Ａとする）

(4) 穴の上にネガのスヌケ部（未露光で現像した部分）を置き、その上に 0.1ＮＤフィルターを重ねて測光し、EV をメモする。（Ｂとする）

(5) 穴の上に、ZONE Ｉを中心に段階露光したネガ（撮影１で作ったネガ）のコマを順次置いて測光する。（それぞれＣ１、Ｃ２、Ｃ３、・・・とする。



このとき ND フィルターは重ねない。）

(6) Ｂの値と最も近いＣのコマを選ぶ。　そのコマが実用感度の ZONE Ｉとなる。

(7) 測定が一通り終わったら再びライトボックスの面を測光する。それが３のＡとＥＶ0.3（1/3 段）以上違っていれば、光源の明るさが変動していたので初めからやり直す。

ＮＤフィルターが手に入らない場合は次のようにしてもよい。

(4)’ Ｂの代わりに、穴の上にスヌケのネガだけを置き測光する。（Ｄとする）

(5) 段階露光ネガを測光する。（C1、C2、C3・・・）

(6)’ Ｄ－0.33 に最も近いＣのコマが実用感度の基準になる。

［参考］濃度１は EV で０．３０１の差に相当する。

透過濃度　＝　EV 差　×　０．３０１

EV 差　＝　透過濃度　×　３．３３

例）Ａの読み　・・・　EV13

　　Ｃの読み　・・・　EV12.3

Ｃの濃度は　(13-12.3) ×0.301＝0.21

[参考]　濃度０．３ND フィルターは１絞り分（ＥＶ１）の減光になる。

[参考]「濃度」は足し算で計算できる。

濃度０．１と０．３のネガやＮＤフィルターを重ねると、その濃度は０．４となる。

２．スキャナーを使用する方法

■用意するもの

●ブローニーと 4×5 以上のフィルムを読み取れるフラットベッドスキャナー

現行機種では Epson GT-X970 が実質的に唯一

●濃度 0.1ＮＤフィルター

（75mm 角シート）

●パソコン

（フォトショップが使用できるもの）

●フォトショップ

バージョンは Elements で可

（スキャナーに付属している）

■測定手順

(1) スキャナーのフィルムホルダーに段階露光したネガとスヌケ部一緒にセットする。

(2) ネガのスヌケ部分に 0.1ND を重ねる。（適当な大きさにカットしておく）

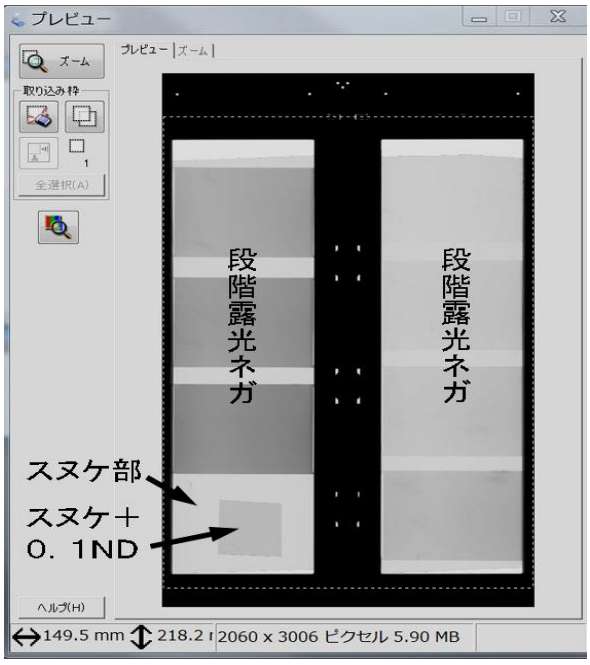
(3) スキャナーの設定は以下のとおり

・原稿：ポジフィルム

・モード（イメージタイプ）：8 ビットグレー

・解像度：100～200dpi 程度

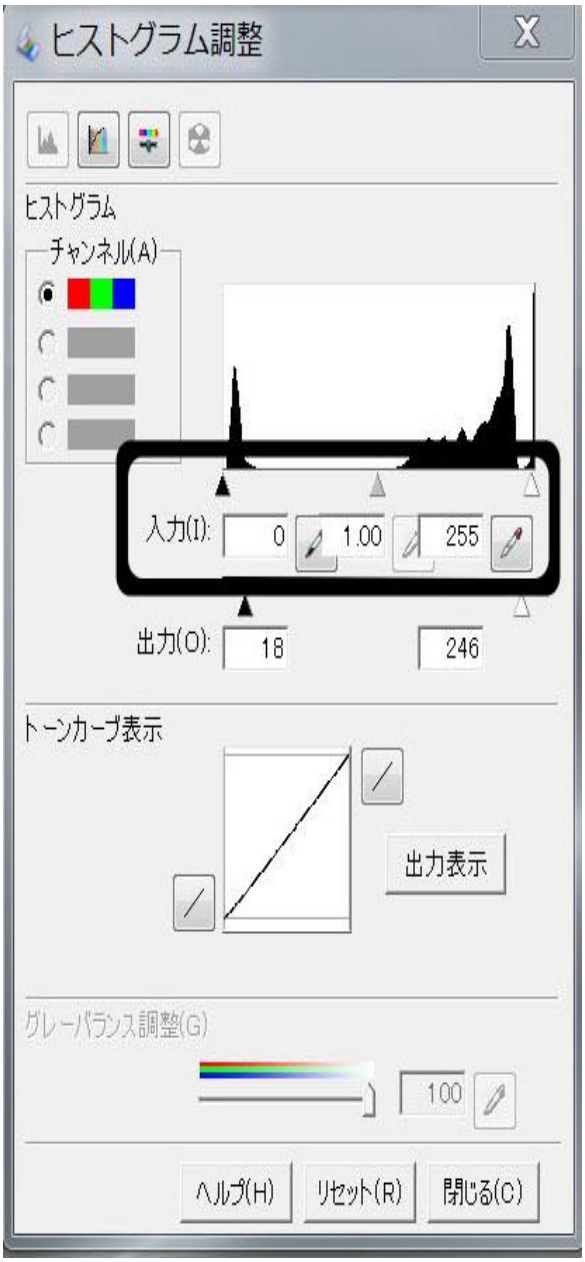
(4) スキャナーでプレビューし、ネガ全体を一枚の画像として選択する。



(5) ヒストグラムの調整を行う。

・入力・・・0～255 の範囲

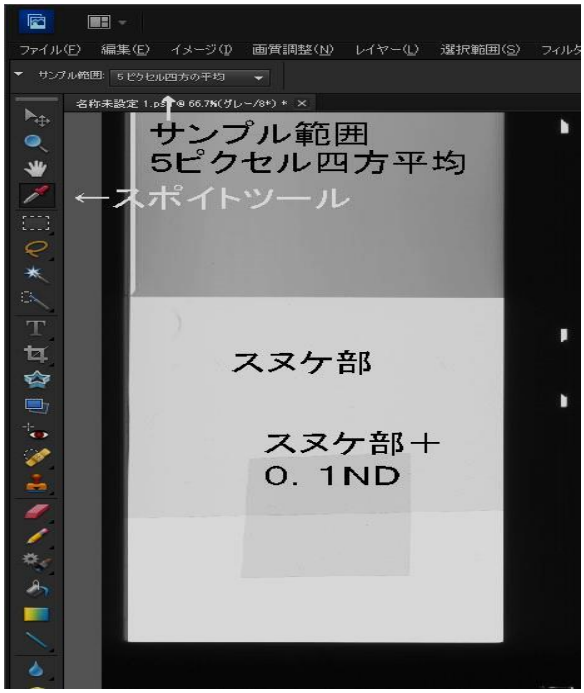
・ガンマ（中点）・・・1.00



(6) 本番スキャンを行う。

(7) スキャンした画像をフォトショップで開き、「スポイトツール」で濃度を測定し、メモする。

サンプル範囲は「5 ピクセル四方の平均」に設定



濃度は「情報」ウィンドウの K%で確認する

まず、ND フィルターとスヌケの重なった部分の濃度Ｋ％を読み取り、メモする。
次に同じ画面内の段階露光ネガの濃度を測定し、これに最も近いＫ％のコマ探す。そのコマが実用感度の基準となる。

３．実用感度

以上、いずれかの方法でスヌケ＋０．１となるコマが決まれば、次の表から求められる。

1／2ＥＶ段階露光の場合

スヌケ＋0.1 となる段階露光のコマ	実用感度
＋1.0EV	公称感度×０．５
＋1/2EV	〃　×０．７
±0EV　(ZONE Ⅰ露光)	メーカー公称感度
－1/2EV	〃　×１．４
－1.0EV	〃　×２

１／３ＥＶ段階露光の場合

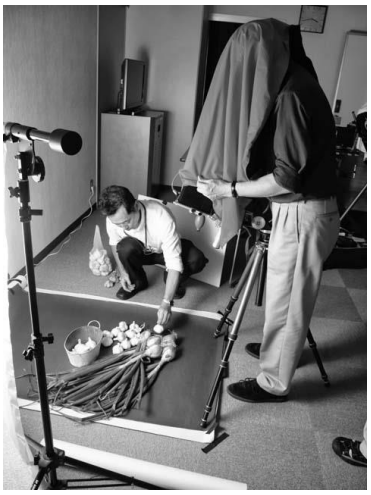
スヌケ＋0.1 となる段階露光のコマ	実用感度
＋1.0EV	公称感度×０．５
＋2/3EV	〃　×０．６４
＋1/3EV	〃　×０．８
±0EV　(ZONE Ⅰ露光)	メーカー公称感度
－1/3EV	〃　×１．２５
－2/3EV	〃　×１．６
－1.0EV	〃　×２

経験上、実用感度がメーカー公称感度より大きくなることは殆ど無いといってよい。

静物撮影会報告

・日時：2013 年 6 月 1 日（土）13:00～21:00
・場所：アカデミー茗台
・参加者：中島代表、荒井、浜野、越後、北野、穴澤、川北、久保田、井川、宮内、畑（手伝い）

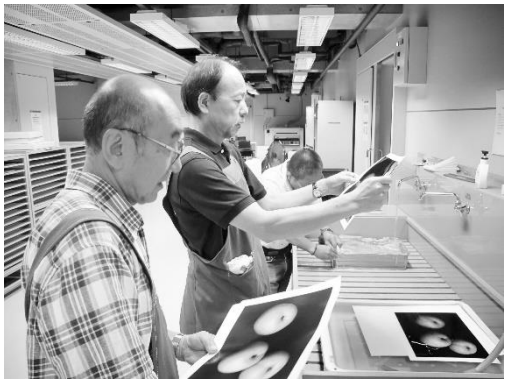
今回の撮影会テーマは「食」。
葉のついた玉ねぎ、肉、生魚、魚のひもの、豆腐、牡蠣、パン、食器、トレイ、氷、等、中島代表の指示により参加者が分担してあらかじめ準備。照明機材、バックシートは中島代表と浜野氏が用意。生ものが多いため撮影は困難の連続であったが、研究会写真展の候補作品も多数生まれ、充実した撮影会となった。



暗室ワーク報告

・日時：2013 年 8 月 31 日（土）13:00～21:00
・場所：工芸大中野キャンパス暗室
・参加者：中島代表、越後、穴澤、川北、井川、松本、長谷川（勇）、皆川、畑（手伝い）

今年も恒例の暗室ワークが行われた。いつものように設備の整った工芸大暗室でのワークショップ。行き届いた指導の下、写真展に出品可能なファインプリントが多数完成した。



ドイツのギャラリーオーナーによる ポートフォリオレビュー ＆ 講演会

荒井崇

ギャラリーコスモス主催で、ドイツのギャラリーオーナー ミケーレ・ヴィトゥッチ氏(Mr.Michele Vitucci) によるポートフォリオレビューと講演会が行われた。筆者はその両方に参加して興味深い話を聞くことができたので、その体験を記すことにした。

ミケーレ氏は、ドイツミュンヘンで、何と日本の現代美術のみを扱うギャラリーを運営されている。ギャラリーの名称は「Micheko ギャラリー」。(2010 年設立) (www.micheko.com) 奥様が日本人で恵子さんなので、ミケーレ氏と奥様の名前を掛け合わせた造語ではないだろうか。あくまで写真は現代美術の中の 1 ジャンルとして扱っているが、ギャラリーのサイトを見ると写真の占める比率は非常に高い。

ミケーレ氏の経歴を見ると、ゲッティイメージズ (写真をストックして提供する会社) 等を経て、現在は写真制作関連のフリーランスコンサルタントを行いながら上記ギャラリーを経営しているとのこと。基本的には写真関連畑の人で、3 度の飯より写真が大好きという。

一方奥様の恵子氏は現代美術が専門のようで、その話しぶりは実に理知的で的確だ。今回はミケーレさんの通訳を行っていたが、通訳でありながら自分の言葉で話しているのがよく分かった。

実はミケーレ氏によるポートフォリオレビュー と講演会は今年 1 月にもギャラリーコスモスで開催されており、今回で 2 回目とのことである。またミケーレ氏はこの後、第 29 回東川町国際写真フェスティバルのレビューアーとして招待されているという。

1．ポートフォリオレビュー

私は、ポートフォリオレビューに自分の作品を持ち込んで見てもらうのは今回が初めてである。ただ、美術館学芸員によるポートフォリオレビューをオブザーバーとして見た経験が数回あるので、その内容はおおよそわかっているつもりだった。しかし今回は、ギャラリーオーナーによるポートフォリオレビューということもあり、内容がかなり違っていた。

ポートフォリオレビューは、ギャラリーコスモスではなく赤坂の Niyama's Gallery で行われた。2013 年 8 月 3 日(土)～7 日 (水) の間、毎日 5～7 人のペースで行われ、1 人の持ち時間は 30 分と決められている。私は 8 月 3 日(土)午後 15:00 の予約。当日私は、他の方のレビューも傍聴したかったので早めに出向いた。しかし、コスモスオーナー新山さん曰く、「今回は作者本人とミケーレさん夫妻 3 人だけでじっくりやらせてあげたい。」とのこと。私はコレクターでもあるので、傍聴も 1 つの楽しみにしていたため少し落胆。(過去にレビューを傍聴した作家から作品を購入したこともある。) しかし新山さんの作者に対するやさしい心使いを無にすることはできない。私は予約時間まで待機することになった。

時間になり部屋に入ると、前の作者が話の続き

をしていた。どうも作者のプライベートな話らしい。作家として活動して良いかどうか作者は奥さんと話し合っているというようなニュアンスだ。奥さんとしては、安定した家庭を築くため夫が作家になることを安易に賛成できないのではないだろうか。アーティストの非情な現実を垣間見た一瞬だった。

そしていよいよ自分の番。まず自分のブックマットされた作品群を机に出す。本来であれば多数の作品を一気に見せたかったが、机が狭いため 1 点ずつ見せることになった。今回持参した作品は、2004年と2006年に個展を行った橋脚シリーズ(会報 no.27 号 no.33 号参照) と未発表の橋梁シリーズ。もちろんゾーンシステムによるモノクローム銀塩プリント作品で、被写体である橋の多くは、既に使われなくなった橋が多く含まれている。

まず聞かれたのが、現在の職業、年齢、そして何より今後作家としてやっていく意思があるかどうか。実は、最初に会ったときの雑談で私が写真コレクターでもあることを話していた。よってあまり作家として私を見ることは無いかと思っていたが、本番では作家としてのモチベーションを確かめることは決めているようだ。ちなみに私は、「作家としてやっていくのが夢」という程度の答えしかできなかった。

ポートフォリオレビューで見せた作品抜粋(橋脚)

ミケーレ氏による私の作品に関してのコメントは以下のとおりであった。

●コンセプトがしっかりしている。

●この橋のイメージは、自然と建物の中間の題材だ。もう少しどちらかに寄せたほうが買い手（コレクター）にとって魅力的であり需要がある。

●以前日本人で、使われなくなったバス停のみを撮影した作家のレビューを行ったことがあり、日本人には使われなくなったものへの愛着が見られる。この作品も同様なイメージを持った。

●基本的にレビューにおいて技術的な話はしない。しかしながら、これらの作品は技術的に何も問題が無いと言える。また構図に関してはもう少し橋全体を捉えた作品にした方が良いと思う。が、それは私の私感であり、それが本当に良いかどうかはわからない。

●「これはアナログか？」の問いに対し、「銀塩アナログである。」と答えると、「やはりアナログの方が人気がある。」とのこと。

●買い手がどのような作品を欲しているのかも少し考えたほうが良い。ミケランジェロやダビンチが王室の依頼で制作した作品も残しているが、すばらしい作品だ。必ずしも作者自身が作りたいと思ったことでやっていくことだけが良いというわけではない。

●エディション設定 16 は多すぎる。通常 6＋アーティストプルーフ（作家保管分）2 くらいが妥当。あなたはコレクターなのでわかると思うが、コレクターは、自分だけがその作品を持っていたいと

いう感覚が強いものだ。ただ、当時の販売価格 2 万円を考えると、安く売って作品を広めるという意味ではエディション 16 で良かったのかもしれない。

その後雑談になり、以下のような話をしてレビューを終えた。

●ドイツ人は作家名/知名度にとてもこだわる。良く調べてから作品を購入する。反対にフランス人は、知名度はあまり気にしない。またヌード作品が好きだ。（やはりドイツ人は日本人に似ているのだろうか？）

●海外での人気日本人写真家は、細江英公、森山大道、荒木経惟、若い作家では志賀理江子、川内倫子など。

●あなたの作品は、この手の作品を好むコレクターがいるので紹介してみる。ただし大変シビアなコレクターだ。

●来週、東川町国際写真フェスティバルのレビューアーとして来週北海道へ行く。時間があればあなたの撮影した北海道の橋を見てみたいので場所を教えて欲しい。（後日、北海道糠平湖周辺の有名な橋の地図を差し上げた。）

ギャラリーオーナーによるポートフォリオレビューを終えて、美術館学芸員レビューアーとの違いを、身をもって知らされた気がする。

学芸員はまず、「展示するに値する作品とは」という視点で、展示方法を含めたアドバイスを行う。これに対してギャラリーオーナー（あくまで作品を売買するコマーシャルギャラリー）は、買い手が付く作品かどうかが基本。また、作者本人が作家としてやっていくモチベーションがあるか、また作家として長くやっていける状況にあるか（作者の生活状況）まで見るのである。要は、例え良い作品であっても、一定期間作品を確実に供給してもらえないとビジネスが成り立たないのである。

ギャラリーも良い作家を発掘できるかどうか生き残りをかけての真剣勝負なのだ。安定した地位にある学芸員のような立場ではないことをしみじみ感じた次第である。

２．講演会

ミケーレさんの講演会は、2013 年 8 月 7 日（水）、ギャラリーコスモスにて行われた。

まずあいさつの言葉。

「写真の世界は 2 極化している。ごく一部のアート写真エリート達（例えば現在新美術館で開催されているグルスキー）と、簡単に撮れる最新のカメラを駆使して撮影している一般の人々だ。かといって、ポストグルスキーはごく一部の人しかなれないとあきらめず、自分の作品に愛情を持って一歩でも前へ出られるような話をしたいと思う。」

まず、ミケーレさんが経営する「Micheko ギャラリー」の話から始まる。

ドイツのギャラリーにおいて写真作品を展示すると、以下２種類の客が来る。

(1) 黒いシャツとズボンの写真家

自分もこういう写真を撮りたいという願望を持ち、撮影機材やプリント紙に興味を抱き、テクニックを学ぼうとする人。大半の客がこの手の人

達であり、作品を買うことはまずありえない。

(2)現代美術として見に来る人

作品自体に興味を持って来る人たち。自分ではとうていかなわない。とうていできない。だから自分の家にあればいいな。というモチベーションで作品を買いたいと思っている人。もちろん作品を買うのはこの人たちであるという。

とはいえ、ギャラリーで初めて作品を見て買う客は殆どいない。大半がWEBサイトやアートフェアで事前に見てきた人である。よってギャラリー店舗は、単なるアーティスト作品展覧会の既成事実を作るだけのものとなっている。

次に、作品を買ってもらうためにはどうすればよいかという話題になる。

まず、日本で自分の作品が売れないが、ヨーロッパなら売れるだろうというのはまちがい。現在ヨーロッパに限らず世界中経済的に不安定であり、生活に必要の無いアート作品はそう簡単に買ってもらえるものではない。ただ反対に考えれば、この不安定な状況で、人はどういうふうに自分は暮らしていくのか？何か安定したものは無いか？の答えを、人々はアート作品から見出そうとするのではないかと思うと、この状況は逆にチャンスかもしれないという。

そして重要なことは、しっかりしたテーマ/コンセプト/ストーリーを持つことで、そのためには以下を実践することが必要とのこと。

●テーマは深く広いものであること。

●作品制作を継続すること。

●創造性を高め、人がやってない視点を育むこと。

●アイデンティティーをしっかり持ったインターナショナルな人間になること。

日本人であれば、日本人としての目を持ち続けること。自国の文化を大切にし、自国の文化を少なくとも英語で説明できること。例えば荒木経惟、村上隆などの作品は、一目見て日本人だとわかる。

●コンテクスト（文脈）を考えること。

例えばポートフォリオレビューで見せてもらった、使われなくなった橋の作品（私の作品）や使われなくなったバス停の作品は、日本の社会問題提起や政治的な文脈を含んでいて大変おもしろい作品である。ただし、場当たり的なものになってしまっては単なる重たい作品で終わってしまう。また反対に、美しい癒し系の文脈を望む人もいる。

更に、これから作家を目指す人へのアドバイスがあった。

●外国語（少なくとも英語）を学んで欲しい。

日本人は特に話すことが苦手。作品は見せるだけでなく、言葉で伝えることも重要。

●WEBサイトはぜひ立ち上げておいて欲しい。

WEB サイトは思わぬところから引き合いが来る可能性を秘めている。ただし、サイト名は必ず実名であることが必要。（例えば「おはようペコちゃん」などはNG）

●アートフェアなどでさまざまな作品を見ることを心掛けて欲しい。

アートフェアの客は、何かを買いたいというモチベーションを持った人のみがやって来る。ここでまず人間関係を作ること。そして今何が売れているか、自分に足りないもの、自分にとって自信になるものは何かを知る機会となる。

ピカソが言っていた。「作品を盗め」まねをしろという意味では無い。新しいものを作ることも重要だが、先人の作品から何かを学ぶことも重要。アートフェアはその絶好の機会でもある。

お勧めのアートフェアは、アルル、ロンドン、ヒューストン、アンコール（カンボジア）、アートケルン（ドイツ）、パリフォトなど。

●海外へのアート留学

できるだけアーティストの集まる街が良い。安い家賃で生活可能なのはベルリン、デトロイトなど。特にデトロイトは格安なのでお勧め。ただしベルリンは、作品を買う人（コレクター）が少ないというデメリットがある。お金のある方はニューヨーク、ミュンヘン、パリなどがお勧め。（カンディンスキーを生んだミュンヘンは100年くらい前、生活費が安くアーティストに適した街だったが）

●ギャラリーへの作品持ち込みは控えること

ギャラリーは、それぞれ自分達のカラーがあり、自分で探すのが基本。作品のアピールは、WEB サイトやポートフォリオレビューで行って欲しい。ただし、ギャラリーの傾向を研究することは必要。

●作品を売る際は、マテリアルコスト以上の価格設定を行うこと。

作品を売って赤字になるようではモチベーションが下がってしまう。価格設定は赤字にならないことをお勧めする。

次に、<u>エディションについて</u>の話。そもそも写真作品の欠点はたくさん同じ作品を複製できることである。70年代まではオープンエディションだったためその価値が低かった。現代の写真作品

は、エディションで作品数を宣言するのが基本。そしてエディションは少ないほど売れるチャンスにつながる。エディションの数は大きいサイズで3くらい。小さいサイズで6くらい。そしてそれぞれに＋アーティストプルーフ2くらいが良い。数が少なすぎるのではという方もいるが、あのグルスキーでさえ、全てのエディションを売り切ることはできない。（グルスキーのエディションは基本的に3）

また、プリントサイズはあまり種類を増やさないこと。種類を増やすということは枚数を増やすことに他ならない。せいぜい2種類くらいが限度。更に、価格を下げることは禁物。価格を下げることは以前の価格で購入した人との信頼関係を損ねる。

最後に<u>質疑応答</u>。以下はその抜粋である。

Q．写真展とは人々に見てもらうためのもの。写真を売るためのものではないのでは？

A．私たちのギャラリーはコマーシャルギャラリー。家賃を支払い、生活もしていかねばならない。

そして写真を売るということは誰かが買う。買うということは大変なモチベーションが必要。作品を自分のものにしたい。自分の一部にしたい。という作品への愛情が並大抵のものではなくなってくる。そこまで高まった時点でようやく作品を買ってもらえる。私たちは、作品を買ってもらうことが最終目的であることはとても素晴らしいことだと思っている。

（質問者がこれを聞いて「Ich liebe dich.」笑）

Q．海外で、プリント作品ではなく写真集販売でやっていくことはできるのか？

A．私自身写真集が好きであり、写真集は人気が出ることもある。しかしながら、あくまで一部のコレクターに人気があるにすぎず、一般的に売れているわけでは無いので、写真集でやっていくのは非常に難しい。特に昨今、安く写真集ができてしまうため、見極めが難しい。やり方の一つとして、２種の写真集を制作する方法がある。1 つは普通の写真集。もう１つは、木箱に入ったオリジナルプリント付のコレクターズエディションだ。あえて高価な設定にすることにより売れることもある。

Q．どんな写真作品が売れているのか？

A．実は、今回のレクチャーでこの件は話さないことにしていた。というのはこの話をすると、オークションなどいわゆる投資対象の話になり、私たちの日常とかけ離れた内容になってしまうからだ。

よってここでは、一般的な統計上における売れる作品の傾向のみ話すことにする。間違ってもすべてを真に受けないで自分のやっていることに自信を持って欲しい。

●縦位置より横位置。

●暗い作品より明るい作品。

●ポートレートは家に置きたくない。

（家族以外の写真は置きたくない。）

（ただし、シリーズのポートレートは個性が失われるので OK）

●デジタルよりアナログ。

●風景写真は、どんなに難しい撮影であっても自分でも撮れると思ってしまうので難しい。

●作者の手が加わっていてまねできないもの。

Q．現代美術の中で写真作品はどのような地位にあるのか？

A．ここ数年前、写真は現代美術の中で大変人気が上がり、価格も高騰した。しかしながら今は落ち着いてきており価格もやや下がっている。

講演会を終えて、ミケーレさん夫妻の写真作品に対する情熱の余韻を感じた。ある意味において、ゾーンシステム研究会とは写真作品に関する考え方の違いはあるかもしれない。しかしその情熱は、私達も彼らも同じであることに間違い無い。

ゾーンシステム研究会定例会日誌

2013 年 7 月 13 日（土）

文京区シビックセンター会議室

・出席者：中島代表、越後、穴澤、松本、佐野、浜野、川北、北野、荒井、金子、岡崎、畑、倉又、酒巻、長谷川（勇）（新入会）

・作品持参者：越後、穴澤、松本、佐野、浜野、川北、北野、荒井、金子、岡崎、畑

■中島代表より

・猛暑のため、印画紙現像液の温度管理が難しい。温度が上がると色味が変わるので注意。

・暗室ワークは 8 月の土日で工芸大へ申し入れている。

・写真展だけでなく絵画も見てヒントをつかむことも大切。

「遊ぶシュルレアリスム」展（損保ジャパン東郷青児美術館　8 月 25 日まで）がおすすめ。

・写真展情報

「森ヲ思フ：ウィン・バロック、志鎌猛、宮崎学の写真」

清里フォトミュージアム　12 月 23 日まで。

撮影会を兼ねた見学を企画したい。

■金子実行委員長、荒井委員より

・写真展（11 月 5 日～17 日　ギャラリーコスモス）の開催時間は 11 時～19 時までとする。

・DMと広報に使う作品は本日決定する。選定された作品は 8 月例会に RC ペーパー５×７サイズで 30 枚持参すること。

2013 年 8 月 10 日（土）

文京区シビックセンター会議室

・出席者：中島代表、佐野、松本、岡崎、長谷川（勇）、北野、畑、越後、穴澤、浜野、荒井、倉又、皆川、井川

・作品持参者：佐野、松本、岡崎、長谷川（勇）、北野、畑

●中島代表より

・暑い季節の撮影について

博物館、美術館でも撮影できるところがある。大型ショッピングセンター（IKEA など）で目に付いたデザインを撮ることもできる。

・KMOPA の見学を兼ねた八ヶ岳の撮影を行いたい。特に写真展出品策が決まらない人は同行してほしい。日程は検討中。

・菅野氏が暗室用品などを処分する。いったんは中島先生宅に預かることにしたい。運搬作業協力に数人が必要。日程は調整中。

（後日 8 月 17 日（土）に決定した。）

2013 年 9 月 14 日（土）

文京区シビックセンター会議室

・出席者：中島代表、北野、浜野、松本、穴澤、石井（ネガのみ）、金子、荒井、畑、岡崎、古谷津、長谷川（勇）、田中寛二（新入会）

・作品持参者：浜野、松本、穴澤、石井（ネガのみ）、金子、荒井、畑、岡崎、古谷津

■中島代表より

・写真展の出品作が少ない。臨時の撮影会を実施するので参加していただきたい。

・静物撮影会の経験を生かし、さらに作品作りを進めてほしい。秋になって色々な素材も出てきている。

・アンドレアス・グルスキー展

（９月１６日まで　国立新美術館）

３億円で落札されたというが、ドイツ写真の伝統らしく温かみの乏しい写真であった。

2013 年 10 月 12 日（土）

文京区シビックセンター会議室

・出席者：中島代表、鶴見、松本、穴澤、石井、金子、荒井、畑、岡崎、長谷川（勇）、倉又、越後、岡崎、橘田、北野、川北、井川

・作品持参者：松本、穴澤、石井、金子、荒井、畑、岡崎、長谷川（勇）、倉又、越後、岡崎、橘田、北野、川北、井川

■写真展関連

・11/18（月）までに作品データ提出（→荒井）

・11/2（土）：例会にて額装チェック→作品発送

（このとき販売キャビネもチェック）

・11/4（月）：展示作業（ギャラリーコスモス）

・11/9（土）：14:00～会場にて好評会

（このときテキストを会員に配る）

17:00～パーティ

・DM：完成後会員へ 20 枚ずつ発送

（追加希望の方は金子氏まで連絡）

（DM 完成は 10/18 前後の予定）

・作品のサイン（今年から裏にもサイン記入）

・表：左下にエディション　右下に名前

（サクラのピグマがお勧め）

・裏：名前、タイトル、制作年

（柔らかい鉛筆で入れること）

・研究会控え用作品提出のこと。（→荒井）

（サインを忘れないこと）

・今年は、会場にてゾーンシステムテキストを販売する。（浜野氏作成中。まもなく完成予定。）

■新潟撮影会

・撮影場所：新潟の内陸から海岸にかけて。

・日程：11 月末を検討中。

・この時期は悪天候で風が強いので注意が必要。

Information

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリント又は JPEG データでお願いします。

２．手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。

・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの。
（スキャナーでパソコンへ入力します。）
・パソコンの電子メール
・ウィンドウズの Word2000-2010
・text ファイル
（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2010 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に御連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

［編集部］荒井　崇

［表紙の作品］

・作者：倉又茂
・タイトル：旧海軍軍需部長浦倉庫
・フィルム：FUJI NEOPAN 100 ACROS
・レンズ：90mm
・絞り：f64
・シャッター：1/8 秒
・キーゾーン：正面壁（Ⅴ）
・ハイライト：手前砂地（Ⅶ）
・シャドー：窓（Ⅲ）
・印画紙：SEAGULL VC-FBⅢ